

編集室

床屋さんがなくなった

現在の地に住まいを移してから通っていた町内一軒だけの床屋さんがなくなってしまった。聞けば、30年以上店を営んできたが、客の減少、後継者がいないこと、加えて水回りの補修に多額の費用がかさむことから閉店を決意したという。閉店の話を聞き、よく考えてみると、私の住むブロックはマンションばかり建っており、私が住み始めたときにお店と言えばすでにこの床屋さんだけだった。床屋さんはマンションが次々と建った割には客は増えなかったとも言っていた。孤軍奮闘、とうとう力尽き、その床屋さんも消えてしまった。不便になったなと考えながらトイレで用を足している時に目についた本のテーマが「本屋さんという文化」。そういえば、いつの間にかに街から消えてしまったお店は数え上げれば枚挙にいとまがない。

本屋だけではなく、酒屋、八百屋、魚屋、電気屋、文房具屋、雑貨屋、タバコ屋等々。ガソリンスタンドも街なかからなくなりそうである。

話は変わるが、なぜ床屋と呼ばれるのだろうか。床屋という言葉は江戸時代からのもので、髪結いが床店(商売をするだけの人の住まない店)で仕事をしていた髪結床から始まったようだ。当時は髪結いだけでなく、もっと多くの種類の床店があったのだろうが、生き残ったのが床屋なのだろう。「江戸職人図聚」(三谷一馬著)には二階家で仕事をしている床屋、店を構えない廻髪結師や女髪結師の絵が載っている。当時の流行の髪型は

「一日江戸人」(杉浦日向子著)に面白おかしく書かれている。江戸時代は切った髪の毛もリサイクルされたと記憶しているが出典が出てこない。ちなみに理髪という言葉は平安時代からのもののようだ。

マンションがたくさん建ちお店がなくなったのはこのブロックだけでもなさそうである。川向かいもマンションが立ち並んでいる。つぶさにではないが、探索してみた限りではお店が見当たらない。お店が減ったのは、街なかだけではないだろう。母親が住んでいる郊外の団地でも、何件かあった店が閉じて久しい。

広島市中心部は何度目かの再開発が盛んである。広島駅南口にはとてつもなく高層のマンションが二つも建つという。が、再開発が終了しても以前の活気ある駅前商店街や市場は戻ってこないだろう。都市がマンション街化すればするほど人は増えるがお店は減ってくる。ロコモになっては速くの、と言っても多くは徒歩15分以内、床屋に通うことや買い物も自由に行けなくなる。片足立ちで靴下をはくことには危なくて挑戦する気にならないが、40cmの高さの台から片足で立ち上がることが出来る筋力は維持したい。その前に、床屋さんを決めねばいけない。川を渡ればあることは分かっているが、歩いて橋を渡って隣町へ行くのも億劫な気がする。『車で行けば』という悪魔の囁きに耳を貸してしまうことがロコモの始まりなのかも知れない。

(山崎 正数)

広島県医師会速報 2015年(平成27年)10月25日

- 発行所／一般社団法人 広島県医師会 〒733-8540 広島市西区観音本町一丁目1番1号 TEL 082-232-7211 FAX 082-293-3363
広島県医師会HP <http://www.hiroshima.med.or.jp/> E-mail: kouhou@hiroshima.med.or.jp
- 編集者／広島県医師会長 平松 恵一
(広報委員)山中 祐介、小園 亮次、高路 修、佐々木 達、佐々木 龍司、谷 充理、中尾 三和子、平林 直樹、
正岡 良之、吉田 良順、小笠原 英敬、水野 正晴、岩崎 泰政
- 印刷所／レタープレス株式会社 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809番地の5 TEL 082-844-7500 FAX 082-844-7800